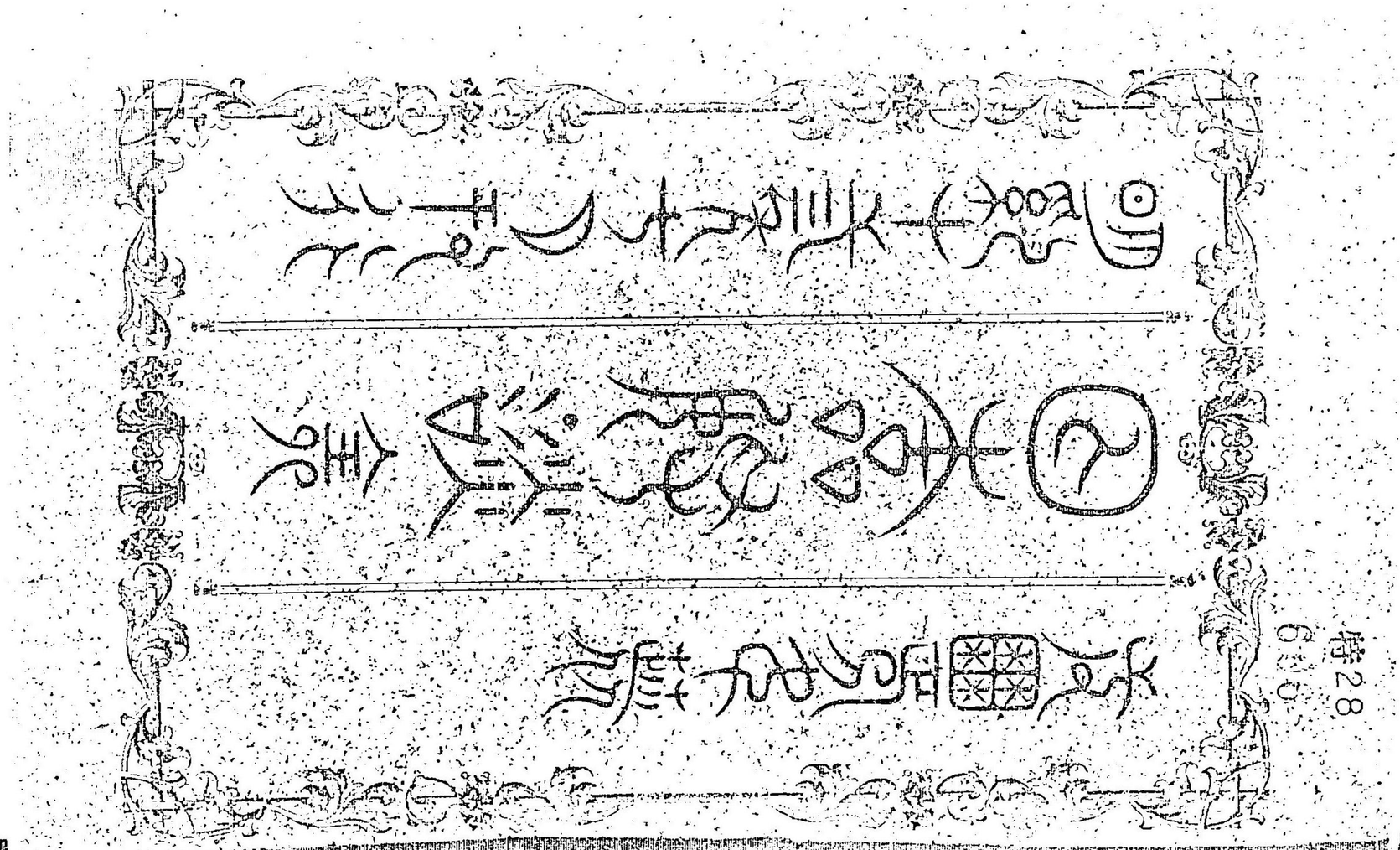
前田正名著

日本美談 全

明治十三年七月刊行



東京圖書館藏書

馳

殊城義感

人心

一六居士 倣題

日本美談序

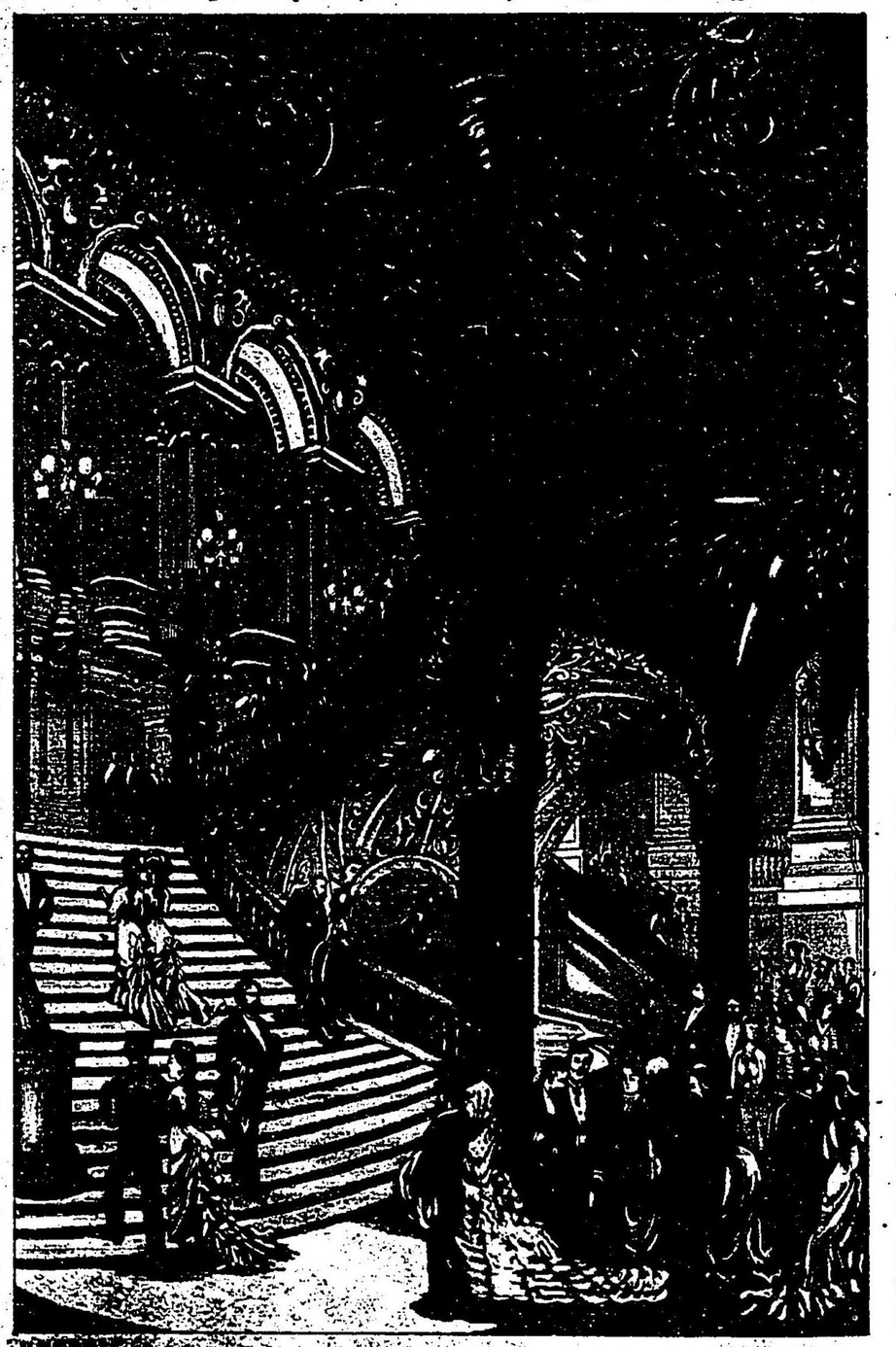
嘗聞之洋學士、佛國有主民權論者、命俳優作歌寓其意、一唱萬應、感動人心、國勢因以大變矣、演劇之能移人如此、前田君正名遊佛國、嘗與名優某交、談及我邦風俗、因述赤穗義士事、作此篇以授之、名優大喜、演之於巴黎市、觀者雲集、莫不稱妙、且曰日本人義氣忠勇如此、始知東洋人物可畏也、頃者我制度文物、至諸雜技、率倣西洋、不能及十一二、動爲其嗤笑、識者病之、未有以奪也、而君之著一出、能使其感服、繼此以往、我忠君愛國之誠、大展於海外、其効功果何如也、昔者楚人知

孫叔敖之子貧、不能言之楚王、優孟扮叔敖以曉楚王、楚王感動、遂封其子、夫全國之所不能得、而俳優則得之、以其巧投機也、相傳清人嘗讀近松所著院本忠臣庫、激賞不已、譯以漢字、傳之其國、事殆與相類、可以爲一雙奇談、此篇原係佛文、今復譯以國語、命余作序書其緣由、明治十三年一月學海依田百川撰

自叙

此戲齣は余が佛國に在りし時我國の人情風俗又は什器飲食などを彼國人等へ示さんと俳優へ授けて興行せしめたるものなり固より架空無根小説にして別に憑る所あるにあらず只我國人國の爲には家をも身をも顧みず最愛の妻子を棄て義に赴くの氣力は斯の如し外人が野蠻なりと賤しむる攘夷割腹なども國を愛し名を重んずる赤心より出る所にして偏に賤しむべき事にあらざるを知らせんが爲なり脚色は赤穂の義士大石良雄が復讐の深心苦行を基とするといへども彼は僅に故主の遺恨を露せしものにて其事項甚狹し故に愛國の義氣を示さんが爲に假に他國より侵略して國土を奪取し者を攻亡し恢復を計るをもて主意

げきおうりくちのづ



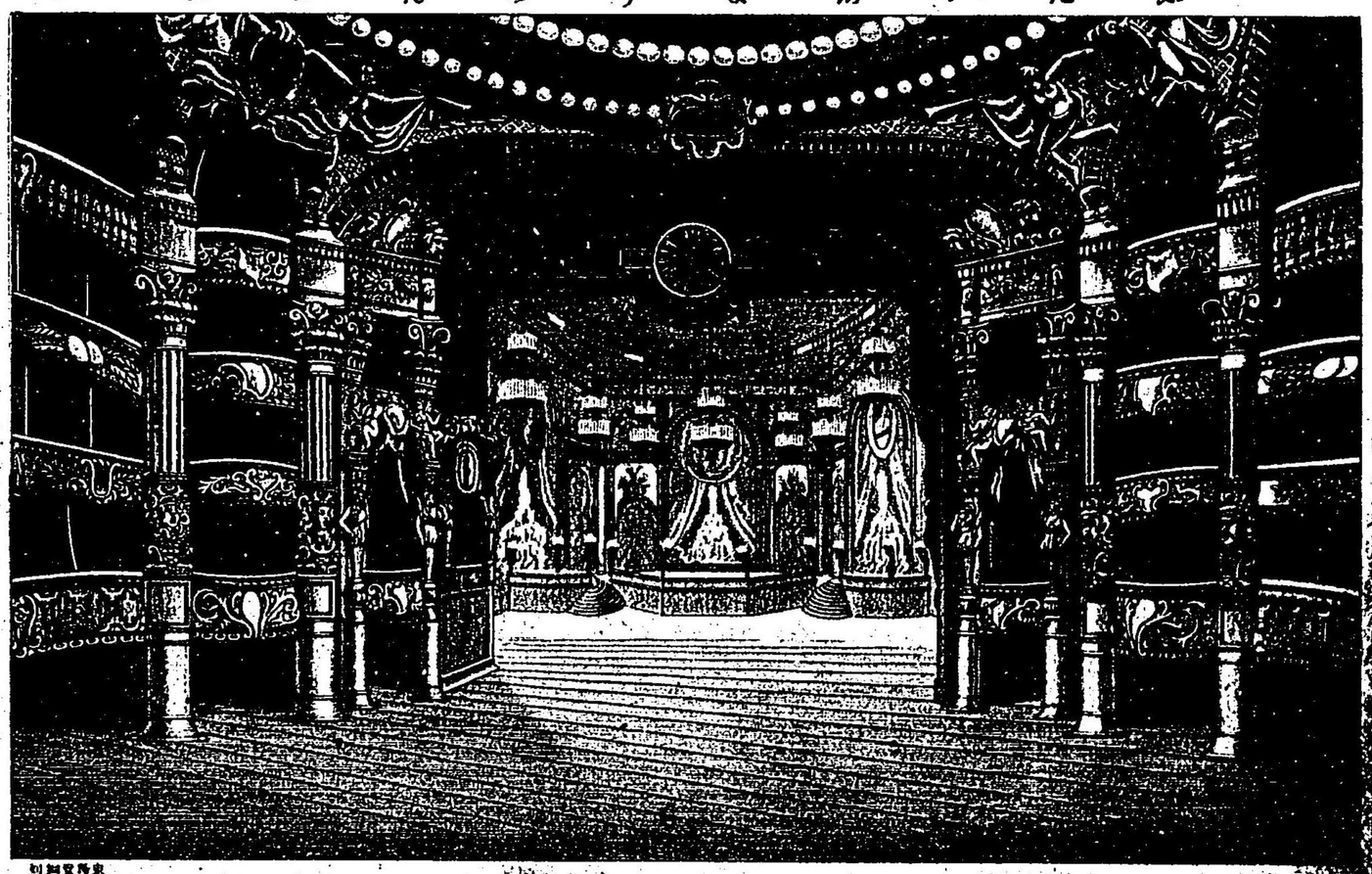
とし加ふるにゝの忠臣藏の彷彿を借る譬へば一場の夢物語なりされば何れの時代といふとも定めず又卷中の人物は皆假の姓名なり强ちに其名に拘泥て彼の赤穗義士の復讐談と異同あるを怪むと勿れ

附言此戲齣は本佛京巴里の俳優へ授けんとて起稿しものなれば初より佛國の戲齣文に綴りしなり而るに今年歸朝の際或人の所望に任せ數日の余暇を以て和文に綴り直せしものなれば我國の戲齣にゝ似るべきものなら

ず看者其拙を笑ふ可らず

明治十二己卯の冬築地の寓居に於て　前田正名識

ぶたいあようめんのづ



東陽堂製印

日本美談

四幕六段

序幕

第一段　酒樓の假宴

二幕目

第二段　義擧の謀略

三幕目

第三段　莊院の談話

第四段　富士の山路

第五段　一家の哀樂

四幕目

第六段　闔國の安危

日本美談狂言役割

大石瓦雄　モンチー氏
小山田庄左衛門　ギュッテルト氏
幇間喜八　クールセル氏
原惣右衛門　ルチー、ラヴェルヌ氏
竹林唯七　フールニエー氏
大石の僕義助　ド、フェローギー氏
菅谷半之丞　サムソン氏
敵方の官吏　ギュボアー氏
小山田の妻早苗　ハダマル女
藝妓お島　ロザモンド女
同お輕　ガレー女
小山田の弟庄之助　ヴィグノール少女
同下女お三　アンドレー女
同下女お熊　ガブリエル女
小山田の母晩稻　マリー、ギュマス女

右ハ千八百七十九年二月廿二日佛京巴里〔マチチー、アンテルナシヨナル〕座ニ於テ初テ日本美談ヲ興行セシ時ノ役割ナリ

第一段　酒樓の假宴

舞臺一面酒樓の作りにて坐敷毎に酒客あり杯盤を陳ね茶烟草盆抔推並ぶ酌人は團扇を持者あり又い銚子を持て酌とする者もあり皆々笑ひ興ずる體」大石瓦雄喜八と云ふ者を伴ひ一人の官吏を招待して饗應の體」前面の席には小山田其餘の義士二人一席にて大石の居る坐敷を詠めながら團居する體

幕明にて肴喰ふ者あり酒呑む者あり烟草吸ふ者あり樓婢い酒肴抔運び給仕する體」

暫くありて一少妓手踊をなす衆妓は囃子方となす

（大石）（客の官吏に向ひ）沈魚落雁閉月羞花實に美少婦でムルナア

（前面の坐敷に居る諸士之を見て苦々敷顔色をする）

（喜八）イヤ又此女子の音曲も感心なものでムリ升○オイ〻婢輩三線を貸してお呉れ私も妙音が喉に支へて堪らぬ一曲謳つて聞せよう（ト三絃を持て自分も歌ひながら彈く）

（大石）（手を打ながら）餘り眞面目では興が薄ひモット陽氣に致すがよい（此時流行唄の音曲にて賑に噪ぎ又酒宴となる）

（大石）（客の官吏に向ひ）改めて一ッ獻ドまシよう○お輕酌を致せ

（お輕）旦那御手が搖ますから御酒が外へこぼれ升

（大石）ナニ身共の手が搖るものゝ和女が身共の顔に恍惚て手元をよく見ぬからジャ

（お輕）旦那推が強い事何で御顔を見ますものか

（喜八）兎も角も旦那が先刻から一杯上りたいと御待遠な御樣子が見るぬと云ふ事がわるものか

（大石）イヤ併しお輕は誠に氣輕でよいが其所に居る女子は何と致したものジャ何を左樣に心配して居るのジャ

（喜八）彼は口紅のはげぬやうにすまして居るのでムリ升

（お輕）否此孃は情郎の事で鬱氣で居るのですよ

（大石）コリヤお島其情郎の事語て聞うせよ

（お島）ハイ妾は情郎故に一人の母を捨て、故郷を出奔し途中にて情郎に別れ詮方なく早晩情郎に廻逢ふ便りにもならふかと存じまして習ひ覺た歌三絃を事業として所〻方〻の酒樓に出入致しまするッイナー

（大石）（客の官吏に向ひ）沈魚落雁閉月羞花實に美少婦でムルナア

（前面の坐敷に居る諸士之を見て苦々敷顔色をする）

（喜八）イヤ又此女子の音曲も感心なものでムリ升○オイ〻婢輩三線を貸してお呉れ私も妙音が喉に支へて堪らぬ一曲謳つて聞せよう（ト三絃を持て自分も歌ひながら彈く）

（大石）（手を打ながら）餘り眞面目では興が薄ひモット陽氣に致すがよい（此時流行唄の音曲にて賑に噪ぎ又酒宴となる）

（大石）（客の官吏に向ひ）改めて一ッ獻ト申さう○お輕酌を致せ

（お輕）旦那御手が搖ますうら御酒が外へこぼれ升

（大石）ナニ身共の手が搖るものう和女が身共の顔に恍惚て手元をよく見ぬからジャ

（お輕）旦那推が強い事何で御顔を見ますものか

（喜八）兎も角も旦那が先刻から一杯上りたいと御待遠な御樣子が見ゑぬと云ふ事がある ものか

（大石）イヤ併しお輕は誠に氣輕でよいが其所に居る女子は何と致したものジャ何を左樣に心配して居るのジャ

（喜八）彼は口紅のはげぬやうにすまして居るのでムリ升

（お輕）否此嬢は情郎の事で鬱氣で居るのですよ

（大石）コリヤお島其情郎の事語て聞うせよ

（お島）ハイ妾は情郎故に一人の母を捨てゝ故郷を出奔し途中にて情郎に別れ詮方なく早晩情郎に廻逢ふ便りにもならふかと存じまして習ひ覺た歌三絃を事業として所〻方〻の酒樓に出入致しまするッイナ

（喜八）何を獣痴な男旱りもしいせまいに

（大石）成程喜八の云ふ通りだナアお輕アハ、、、、

（前面の坐敷に居る諸士の面々）

（原）果して噂の通り大石は酒興の爲に忠義の心を失ひ升タ

（竹林）一味同盟の頭領とも仰がれし人が此有様は何事ぞ

（小山田）以前い武士の龜鑑となりし人斯る所業に陷りては彼が名譽の汚れ寧の事に打果して呉ん

（原）イヤ待玉へ小山田氏夫も無益の殺生なり

（竹林）猶よく様子を見聞せん

（大石）コリヤお輕一ぷく附て呉れ○是は忝なしシテ其方は又身共の顔を見るナ

（お輕）大きにお世話箸の上下に眼の詮議をなさる蒼蠅てなりません

（喜八）お島さんが余り鬱氣で居るから大切な御客様が浮き玉はぬ

（大石）夫のみならず御客様い忝くも上様御遊興の席に侍り玉ふ御方なれば中々我等風情の饗應にては面白はムるまじ。時に承れば御主君御遊興の御催しい毎時御盛なるよし貴殿は上様御親衛の長なれば何卒御手引を以て近日拜見に罷出度存じます

（原）諸君聞玉へ彼所に居る者は我家國を奪取た讐敵方の權臣なり

（竹林）うゝる者と交るからは遊興に耽るのみに非ず榮利に走る卑怯者

（小山田）イデ彼奴を引捕へ誓文違背の罪を問はん

（大石）お島其方は御客様の御盃がいつも空に成てるのが見ぬか

（お島）ハイ（と注ぐ）

（お輕）大石様貴君は御自分の御盃がいつも一ッぱいに成てますのが見へませんゝ餘り他の事に御世話が過るゝら御自分の事を御忘れなさい升よ（トやりてめる）

（大石少し立腹の様子にて）下素女の分劑を以て客の咎立を致すとは奇怪千萬なり（ト叱り又お島に向ひ）其方は泣顔をして人の興を醒す奴ジヤ何れも立去れイ（ト二婦を追ひ拂ひ彼の官吏に向ひ）御主人御殿向の御守衛の御摸様一ト通り御聽せ下されよ（此時官吏は前掛りになり小聲にて何か囁

やく）

（原）小山田氏彼れ見られよ大石い彼の官吏の動向の事を尋ぬる様子是には何か事故あらん戯れ事にはよもあるまじ拙者先刻より得と大石の擧動を見るに彼の女子の申す通り自身は一滴も酒を飲ず彼の官吏に斗り飲せる事合點行かず

（小山田）イヤ事故もあるまい最早大石は十分に醉て居るからでムる見玉へ殆ど醉倒れんとする様子と致して居り升

（此時お島は大石の坐敷を退ひ退けられ前面の坐敷へ來り小山田の側へ寄り）

（お島）御侍さん無躾ながら一ッ上升

（小山田）身共は酒が嫌でムる盃を其所へ置て彼方へ往きやれ

（ト愛想もなく斷る）

（お島）チヽ怖い妾は未だ御坐敷馴ぬ者ですから御氣に障りましたら勘辨して下さいよ（ト詫る。此時お輕は小山田の後へ廻り團扇であふぐ）

（お島）且那お輕さんの團扇の風は格別でムり升ふ

（小山田）一層おら〳〵敷聲にて）エヽ蒼蠅女子共ジヤ搆ふて呉るナ

（竹林）小山田氏夫レは餘ッ嚴格ジヤ此婦人共貴殿に無禮と致すわけではなし其樣に御叱りめさるナ

（大石）天照太神も昭賢あれ決して他言は仕らぬ（是は大石方にて密談の終りし相圖と云るべし）

（小山田）アイヤ竹林氏それがしは藝妓なんどの愛想と受け

んとて國元へ母や妻子を殘して出府は仕らぬ

（お島）ハイ〳〵大に御道理さやうならば（ト立て行く）

（原）小山田氏貴殿の云はるヽ所至極尤なる道理なりさりなから余り道理に泥むと反ッて無理になる事あり（ト諫める。此内二人の女は小山田に叱られて本の坐敷へ戻る）

（喜八）茲へお來何も左樣に嫌はれる所へ往なくてよいサ

（大石）あんな髮屈ものは隅の方へ置て搆ふな

（お輕）（小聲にて）あの人達はみんな怖い顔をして暗殺とやらでもたくみさうな士ですよ

（大石）イヤコレ滅多な事申まひ今國中の士民皆忠義のもの斗りにて上樣にも御心配なく御遊興遊ばさるヽ太平の御世に左樣な輩のあるべきや○（客の官吏に向ひ）貴殿何卒折

を以て此瓦雄も御前へ御吹擧下さるべー

(小山田)(刀と取て突立上り)ヤア正ーく貳心者と極たりモウ

勘辨相ならぬイデ眞ッ二ッに

(原)先〻靜まり玉へ

(小山田)斯る者を生ー置ては一味徒黨の壞とならん之を殺して諸人の臍を固めん

(此時彼の官吏は大石に暇を告る)

(原)去ながら今左樣の暴擧に及ばい却て警敵の嫌疑を起し一同の破滅を招うん

(此方にては小山田坐に就く彼方にては大石坐を立ち客を送ながら

(大石)是非に御歸りとあれば余儀なしさらば又御目に懸る

でムらう(ト客を送り出し前面の坐敷を屹と見渡ー獨言)己はあの者どもが立てから歸るとゑよう

(喜八)大石樣モウ御歸りでムり升

(お輕)マアモウ一盃召上れ○お島さん御酌

(喜八)お島さん何ぞ一ッ歌ふか(お島アイト三絃を取て調子を直して喜八と連彈で歌う○大石はお輕に團扇であふがせ手を拍ちながら眼て仕舞ふ)

(斯る所へ前面の坐敷より三人の侍蹌蹌ながら歩み來り故意と刀の鐺を當て大石の膳を顚倒す今一人は三絃の棹へ突き掛る)

(喜八)御武家さん御氣を付けなされ

(原)ナニ此白痴漢其方が氣を付ろシテ一體其方は何者ジヤ

（喜八）私かへ私は何でもねへ只の江戸ッ子サ

（竹林）ナニ穢多の子ジャ穢多でも非人でも盲目ジャあるめへ个樣に燭とつけて居て身共の通行するのが見へぬう

（お輕）夫は且那御無體ナ

（小山田）默れ女汝等如き下素者が口と出す所でいなれい

（原）コリヤ幇間其方の三絃余が脇腹と突毀したぞ定めて忍あつて致せし事ならん

（喜八）ナニ三絃で脇腹を突毀しやしたと大そうらしひ此やうな脆ひものでそんな手荒なことをすりやア此方が毀はれる云掛りにも程がある（と弱みを見せず振へ聲を嚙しめながら歌て居る）

（竹林）（三絃をはね退けて）此樣奴と問答い無益ジャ三絃で打

ちのめせ

△喜八○原□竹林掛合

△私が何と仕ました○何故無禮を仕た△イヤ貴方から□默れ○返答致せ△一體□云譯ならぬ其方よと仕掛たのジャ△コリヤ御無体な○故意と致したであらうナ△イヽヤ○此奴虛言と申すナ△全く以て○有体に申せ△恐入ました□然らば心あつて致したと申すカ不埒ナ奴ジャ下に居れ△斯の通り○詫言を申せ△恐入てはムり升るが何と申し上て宜しきヤ□考へて見ろ

（喜八）縁故は存じ升せぬが偏へに御容赦を願ひ上げ升る

（お輕）此三絃が粗忽に御腰の物へ突掛り升して誠に恐入升

其平御免下さり升せ

（お島）私ハ疊へ轉り升た茶碗とッイ押へ升てムり升御氣に障り升たら御勘辨を願ひ升

（小山田）其方共はそれで堪忍して遣す今度は茲に眠て居る奴だ

（お輕）ア、其御人は夢にも知らぬ事でムり升ワイナア

（小山田）イヽヤ眠ては居らぬ我等を愚弄し居るのジヤ

（喜八）此方は大そうに酩酊てムるから御搆なさるな

（小山田）此噪を知らずに眠て居るゝらは餘程醉潰れて居ると見へるナドリヤ少しは生體があるか起して見んオイこゝな人仲間のものが困て居るのを知らぬゝ

（原）モシ〳〵寢惚先生我等の茲に居るのが見へぬか

（お輕）何か面白夢でも見てござんせう許して置きなされイ

ナア

（小山田）其夢と體と共に中途で切て呉よう

（喜八）ア、可哀そうにあの世で目が覺たら喫驚なさるだらう

（お輕）シテ其魂魄が牛ゝ馬の體へ入たら嘸御歎きでござんせう

（小山田）然らば刀の尖でそゞつてやらう

（お輕）御待なされ御目が覺たやうだ

（小山田）並大体の醉ではなんから鞭でゞも敲ゝなければ目が醒めまん（此時大石頭を擧げる）コリヤ貴殿は何人なるか

（大石）（面倒なる樣子にて）イヤ諸君拙者の事と御尋ねゝなラば御聞せ申さん拙者は名もなき懦弱の士殊に近頃老衰

して劔戟の業に堪へず涙人の身と成て世事の心配なく生涯を終る所存の者でムる

(小山田)シテ涙人殿の御姓名ハ

(大石)イヤ〳〵名乘まゐ姓名などは拙者も殆ど忘却致した詰らぬ事に御心配と申すものヲヤ拙者は只酒を呑み放言を吐て眠る斗り外に能なき人間でムる○一體貴殿は何故眠て居た拙者へ對し左樣に御立服なさるゥ

(小山田)貴殿の友朋だと申す此者が拙者共の通行を妨げまゝたからでムる

(大石)夫は嘸御立服でムらう拙者彼等に代て幾重にも御詫と仕る

(小山田)其許は居眠りをしながら應對と成る無禮でムるヲ

(大石)イヤ居眠を致す譯ではムらぬ眠い目を無理に開て居るゥらでムるドリヤ見かけた夢の見直と去やう諸君御免下され

(原)御兩人御覽なされ姓名も申さずして又眠り升御免しめさるカ

(小山田竹林)ならぬ〳〵起さつせへ

(お輕)助て下さいヨー

(お島)誰ゥ早く來て下さいヨー

(喜八)人殺しー

(此時奥の方に官吏風體の者此方を窺く)

(大石)諸君は瑣碎事と言寡り公裁になさる所存カ但は一時の坐興なりヤ

（原）（小山田の袂を扣へ）餘に事を荒立なば讐敵の探偵吏に怪まれん

（大石）是しきの事左様に囂々しく噪ぐとはムらぬ先々下に居られヨ知己の印に酒一ッ獻らせん拙者東堂を仕るモウ姓名などを強迫に尋るとは休になされ

（原）何を申すう暫く同坐致しては如何でムる（ト兩人へ相談する）

（竹林）さやう〳〵此所にて様子を見届ん

（小山田）（餘儀なく承引して）然らば御主人の勤に任せ一ッ頂戴仕らん

（お輕）御客様へ御袿を（樓婢アイと持て來る）

（大石）女共酌を致せ

（原）まづ貴殿より

（大石）然らば此通り（と一杯呑む）

（原）小山田氏御覽なされ彼は兎角呑のひふりをして實は呑みませぬ何か底意のある事に相違ムらぬ

（大石）何と密々御話なさるコリヤ酒は御意に入らぬと見へる御飯を上げ升ふカナ時に女子共面白話を致すカ又は三絃でも琴でも彈て御客様を饗應ぬカ

（喜八）大石さん此御客様方は音曲など御嫌の御様子でムるら強て御勸なさるナ

（原）ハヽア貴殿の御名は大石さんと申すカ。イヤ大石さん此者の申すとは虚言でムる何ウ一ッ曲所望仕る

（大石）サア喜八端唄でも歌へ

（喜八）私は聲が惡ていけません

（竹林）是非に一ッ曲

（喜八）さらばお島さん一ッ彈て下さん獨りでは困る○餘り噪がしくなく

（大石）某は美婦を詠め美酒を呑み其方の美聲を聽聞致さふ

（端唄を聽きながら大石は眠る其内唄も濟む）

（原）イヤ太夫大に御苦勞

（竹林）此旦那は眠て仕舞ふた寧のと自宅へ歸て寢た方がよろしからう駕籠を命じて此儘ソット送て進ぜよ

（お輕）（樓婢に向ひ）御駕籠を云付て下さん

（原）まづ大石の樣子も荒增解りました此上は自宅へ罷越して一ト問答致すがよからう

（竹林）何處に住つて居るカ此幇間に尋て見升ふカ

（小山田）夫には及ばぬ潛に跡とつけて見升ふ

（此時轎夫來る）

（お輕）靜に御駕籠へ入申て御呉れ

（轎夫大石を駕籠へ入れる）

（喜八）御宅は石町だよ

（竹林）石町だと申し升るぞ

（小山田）然らば其へ參て再び面會致し京都の同志の者より托まれし尋問の件々一々返答致させ違約の罪を糺すでムふ

（喜八）大石樣御獨では御淋からうドリヤ私が御供を致さふ

（お輕）左樣なら御機嫌よう

（お島）又明晩

（竹林）何れ近日

（小山田）ア、よし心地に眠て居る今に我等が推参し門の扉を打毀し眠氣も醉氣も醒して呉るぞ

（轎夫かつぎ出す喜八端唄をうたひながら供する三人の武士心ありげに見送る是にて幕になる）

序幕終り

二幕目

第二段　義舉の謀略

舞臺右の方は庭の作りにて左の方は過半住居の掛り表に小部屋一ト間あり奥に坐敷一間あり壁には武器を掛け連ね一方には屏風を立て廻し床を敷き其側に机一脚あり行燈の火影薄暗き體

（義助）（大石の僕なり小部屋の内に眠りしがふと目を覺しモウ餘程夜深であらう何時だか去らん外は眞暗だ旦那の御歸りが遲ひのは誠に案じられてならぬ。前には御行跡の正しき御方であつたがどう云ふ事ゝ近頃は晝夜を分たぬ御遊興世間の人の寢靜まる時分に惡所場を狂ひ歩行て夜を深し歸りはいつも八ツ七ツハテ困たものだナア（折ゝら表に唄の聲聞ゆ）ア、何だ馬鹿〳〵し

ハ此深更にがや〳〵と歌ひ歩行やかましいやつである（とつぶやきながら横になつて枕につく此時門の戸を敲く音トントン〳〵。義助手燭を持て庭へ下り表の方へ驅出しながら）

あれは旦那の御聲ではなかたしか御友達の聲のやうヨヤ旦那は常住酔潰れてムるから聲も何も出はしない（と云ひながら喜）

（喜八）イヤ轎夫旦那の御目が覺ぬやうにして來たのは別して大儀シテ私が端唄をうたつて旦那を寢せつけながら來たのも中々大儀であつたッコデ又旦那の御目の覺ぬやうに御寢間へかつぎてむだ若衆靜かに抱き上げてヨーシ義助どん案内を頼むぞ（義助先へ立て奥へ入るあと）

（義助）此所に御床がのべてムる此上へ下してソリヤ枕をヨ

シカ靜かに〳〵

（喜八）ア、草臥たサラバ大石さん是ゝら翌の朝までも午迄でも御勝手に御休なされオイ義助どん御目が覺ぬ中は雨戸を明けぬがよいぜ（と拾言葉に轎夫と出て行く端唄の聲次第に遠くなる）

（義助）イヤよく眠入てムる何程飲だらてんなにたわいもなく眠られるものかナア毎日〳〵此通り昨日も今日も同じと明日もやつぱり同樣だらう二三年前迄ハ世人の尊敬一方あらぬ昔堅氣の御侍主人が善ければ自ら下部の者迄肩身が廣く何處へ出ても自慢顔些も引を取らなかつたが打て變りし御行跡自慢の鼻が低くなり世間へ顔が向られぬ今夜ハ吉原明日のばんは品川とやら新宿とやら惡い所で夜を明し放蕩者と交際てお名の汚も耻玉はず又異形な扮裝

で市中を徘徊仲間小者に指さゝれ牛うつ童に笑ひはやされ一向に頓着なされぬとは何たるとぞ一文不通の身を以て御諫言なぞとゝ恐多しと抑へて居れど此儘に見過しならぬ始末がら是非此頃に折を見て一ト言申上ねばならぬヲ

（此時義助は棧敷の方を向て居る大石が目の覺めしを知らずに語る）

（大石）（ソット起上り後より義助の肩をハタと打ち）コリヤ義助何を申すのジヤ

（義助）（伏ハット平し）旦那様御酒を上り升か

（大石）イヤ何もはしくいなれ己其方が夜も明ぬうちから經を讀むから喫驚して目が覺たのだ未だ起る時刻ではなれ早往て寢ろ

（義助）無禮の段真平御免下さゞ升せ（と詫て下る）

（大石）（あと見送りて獨言）義助の申す事決して無理とは思はぬ去ながら人は知らねど此年月心にもなき放逸無頼モウ我ながら倦ましたドウゾ汚れ着物を脱だやうコメナ馬鹿〻〻敷所行をサツパリと止め早く元の大石に成りたいものジヤア、子供等も嘸心憂く思ふであらんまゝながら六年以來の不行狀を人中で語らるゝとも子供等の赤面せぬやうにい程なく致して遣さん又我妻を罪なくして離別せしい飽までも我放蕩を世に示し敵に由斷をさせん爲なりさりながら緣由を知らねばさぞや怨みんもし我一身の事なれば惜からぬ一命を擲つまでのと何の難きこともあらずさりながら先君御逝去の際に臨み御遺命あゞし一大事も我死せば共に消へんさるが故に一旦の耻辱を忍び跡をくらまし身を潛め靜に事を謀ること六年餘り月日を積で今爰に同志の

者と再會し事を知らしめんと近にあり○今宵彼酒樓にて我を嘲り爭論を仕掛しものの其二人は見覺のある士なり我實情はかく〳〵と告んとせしを耐へて歸れりドウカもう四五日のところ彼等が噪ぎ立てぬやうにしたいものッヤ（と云ひながら机の前へ踞り）ア、家に居る時は馬鹿の面と脫で休息致すやうなものダ誠に樂々とする此苦心を知るものは獨り祖先の尊靈のみ又終夜寢もやらず復讐の志を磨き瞻を錬る多年の密計をうらなく示すは此燈火計りァい是我腹心の友と謂つべし（と獨り自しつゝ筆を執て何やら認めに掛る折うら門の戸を敲く音聞ゆ）（大石耳を立て）あの音はたしかに我門（義助）（次の間より）（壁とかけ）旦那樣あれ御聞なされ誰やら參た樣子起て門を開け升ふカ

（大石）たしかに我門往て開よ○ハテ何者なるう此夜深に來しはモシヤ讐敵の間者ならんうされど事の露顯せし筈もない○オヽ只今認めし書類人に見られては疑念を起す端ともならん此書類と一緒にして此所へ仕舞置けば人の目に着く心配なし（ト壁に仕掛し袋戸の内へ書類を入る○此時表へ出し義助の呼聲聞へ程なく一人の士義助の頸筋捉へながら舞臺へ出る跡より數人入來る何れも黑裝束にて覆面なり一人は義助を捉へて居る今一人繩を出して手足を縛り隅の方へ置く）

（大石）ハテ怪しやナあの呼聲は義助のやうシヤドリヤ往て見ようイヤ待て暫し此所へ多人數近寄る足音サテハ大

望露顯して捕手の者共押寄たるカア大願成就の間際になつて縛首を打たるゝ多年の辛苦も水の泡ナエー殘念や朽惜やナア（此時小山田原竹林の三士入る大石提灯のあかりにすゝー見て）コリヤ要なき心配致した彼等なれば仔細もあらずさりながら今來られてはナト不都合ヨヤ（ト云ひながら猶近寄てトツクと見定め）イヤ同志の方々よくこそ御訪來

（竹林）（腹立聲）ヤア同志呼はり汚はし同志一味と呼替せるは昔のと今貴殿を同志と呼ぶもの我等の内には一人もムらぬ（大石クワツト立腹の體）イヤ腹立れな大石氏昔の大石は貴殿のやうな者ではなつた今貴殿はかの大石の蟬殼ヨヤ夫故某は貴殿を大石とも呼たくムらぬ

（原）我等一統此人ならば同志の長と憑しものが今日此頃の如き擧動あらんとは思きや抑先君御生害あらせられ御葬式の濟し時義兵を擧げて國の讐を報はんと發言せしは貴殿ならずや其時我等同意して血を啜り誓を立てより以來遺恨の念斷る時なく常に復讐の志を蓄へ一人も背きし者なし然るに貴殿獨り誓に背くは二心なり反復なり

（大石）（聲をあらゝげ）何と

（竹林）殊に又先達て貴殿の指圖を受けて上京なせし人々は別して貴殿の卑怯を聞き切齒をなして憤る

（大石）さりながら

（竹林）イヤ貴殿い卑怯者ヨヤ人に先だち復讐の義を發言せし甲斐もなく又人に先だつて逃るとは奇怪至極な卑怯も

のシヤモウ人中へ面出しはならぬ貴殿が大義を棄し故同志の者は貴殿を棄たり此上は片時も早く悔悟して體に生血のある内に腹ろき破て耻を雪がざれば同志はおろか天下の人に棄られん

(大石)方々夫にて云ふ可きことはムらぬか

(原)卑怯者へは言過た

(大石)餘り口が滑り過ぎ後で無禮過言の言譯に困り玉ふナ今四五日相待ば是より委細を告參らす但し暫時も待れぬとあれば詮方なし某が方々所一通り御聞なされまづ某が先年諸君を置て身を隱せし仔細を語らん

(原)ムー先年我等が義兵を擧んとせし時に影を隱して逃れし仔細は別儀にあるまじ卑怯

(大石)ヤー原氏過言なり得と仔細も聽うずして動ともすれば卑怯呼はり無禮の挨拶聽く耳持ぬ○某其時居らざりし故事を擧るに効ありしや然も其時血氣にはやり無謀の事せし者の如く犬死せざりしは是方々の幸ならずやされば未だ事を擧るの時至らざりしならずや

(原)依て近々再擧を爲さん

(大石)迂濶に事を行はゞ幾度するとも事成らずして犬死し終には我國再興の志ある者跡を絶ん某固より諸有志が血氣に任せて思慮少きを知るさるが故に某が心中を告ずして諸君を棄て又妻子をも捨て身を隱し獨隨意に謀を定む

(原)然らば貴殿の計略は

(大石)當時讐敵の威勢盛にして容易頓覆し難し時と待ち虎

に乗じて事を擧るは一朝一夕の事業にあらず寧ろ時日を延べ一ッには幼君の御年を長じ二ッには國中の民百姓暴虐無道の政事を惡む心の深くなるを待つに若ずと思惟せーに果して今日に至ては下民の怨望日に深く我計略の腦に中れり委しき事は今述べ難しまつた警衛の守衛と破るの計も胸中に齊へり凡そ是等の事は今四五日を過ざれば決して人に告まじと深く秘せしところ諸君の怒を解によしなく聊意中を明ー申す

(原)シテ〻〻何ぞ證據ありや

(大石)是まで明せば隱も詮なし之見て疑晴らさよ(と壁に仕掛し袋戸より卷紙に認しものを出して見せる)

(原)(書類を二三表に待せし者共へ貴殿の心意相通じ一同此通讀畢り)

所へ罷出知ぬ事とて此年月御怨申せし粗忽の罪御詫致さん大石氏暫時御免下されー

(大石)何れとも貴殿の御隨意(此時原は坐敷を退き庭の方へ出る)

(竹林)(進出て彼の書類を讀み)昔に變らぬ大石氏御計畧の趣逐一感服仕て厶る去ながら茲に一ッの不審あり此儀は如何に(ト何か推問る大石之を見て指にてさしあがち小聲に解示す)

(原)(庭中へ出て諸君に向ひ)諸君御安心なされ大石氏は二心なぞ抱ーにあらず專ら復讐の計畧を運らせり

(小山田)原氏はあのやうな放蕩者の佞辯にもろくも惑ひ玉へるか

(原)彼是云はずと此方へ參り事の實否を見屈られよ

（諸士の面々）然らば其所へ參るでムふ

（原）（小山田が獨り不服の樣子を見て）小山田氏貴殿は兎角我獨り正直にて思慮ある者と思ふ惡癖あり

（小山田）貴殿は又年甲斐もなく人の言を信ずると餘り速でムる某に構はずと奥へ御入りなされ某は此所に居て夜廻りの者に怪まれぬやう用心致さん數年來身を隱し酒色に耽て名を汚せし小人の甘口を聽くよりは此所に見張番を致すが增でムる

（原）然らば小山田氏後悔しめさるなヨ（ト云ふ小山田は門の方へ出る原は義助の番する士を見て）其者はさやうに縛て置けば氣遣ムらぬ貴殿も一緒に御出なされ（ト云ふ之にて一同奥へ入る）

（義助）（頭を擧げ）此樣な縛方デハ容易解ける（ト云ひながら繩をはづし）何やら樣子ハ分らねど主人と守るハ家來の務幸あたりに人もなし此間に奥へオヽさうシヤ（ト裏手へ廻る）（此時諸士ハ坐敷へ通る）

（竹林）（諸士に向ひ）一同無禮の罪を御詫申さん（ト云ふ諸士平伏す）

（原）備大石氏何かの御指圖ハ綏々承らん先我等一統が無禮粗忽の罪を懲されよ如何樣の御叱を蒙るとも毛頭苦ふムらぬ

（大石）何の夫に及ぶべきや實ハ某も不意の事なりし故最初ハ少し腹も立しが忽地心を取直し升タ

（竹林）いかにも最初は御立腹の御樣子も見へまーたが次第に怒の色失て大度の御氣象面に顯れ時宜によらば一刀に

と思ひし氣力も挫け升タ

（大石）夫ぞ正しく某が不平の心ムらぬ證據是迄疑念のありしゝ互の事某とても一別以來月日の過るに從て諸君の義氣も衰へんかと疑しと屢々あり殊に復讐の日限近づく程其心配益々甚しくいろ〳〵と思ひに相變らざる諸君の赤心某が放蕩を憤り刺殺さんとまでせられしゝ此身に取て大慶至極斯くまで志の厚き人々なれば事ある時ゝ一騎當千

（原）向後ゝ我等一同貴殿の御指圖に從ひ申さん就て先此旨を火急に在京の諸有志へ通達致さねば相ならぬ此程抽者共京都に居り時密々集會せしところ過激の者共ゝ我等より江戸表の狀況を告るを待ず近日に旗を擧げ讐敵を倒すゝ倒されるゝ分目の一戰をなさんと決心致してムる依て我等は江戸表へ下り同志の樣子を探り京都にて旗擧のありしと聞けば當地にては如何の手筈になすや承知致さんと評議一決して彼地を發足致してムる

（大石）願は我國土守護の諸神此五日の内に左樣な事のなきやうに守らせ玉へ

（竹林）京江戸の談合齊はずして事起らば諸事畜餅に相成ん

（大石）只今より偖なる者を上京致させん此役目は誰へ頼み升ふや

（諸士一同）拙者へ

（大石）イヤ是は火急の使あれば壯年の人でなければ相叶はぬまつた途中に於て如何やうな事あるとも夫が爲に遲延

致すとてれなきやう役目を屹と相守る剛直の人でなければ相成ぬ依て諸君の中にて尤も年少にて剛直の者を選まれよ

(竹林)然らば差詰小山田氏

(諸士一同)いかにも彼へ

(大石)某未だ小山田と申す仁は存じ申さぬ何者でムるか

(竹林)成程大石氏には御存知あるまひ彼は近頃成人して同盟に加はりし者にてすなはち貴殿の御存知なる小山田重兵衛の倅でムる

(大石)されバ申ぶんムらぬ父の勇ましき最後を見し者なれば剛氣の若者でムらふシテ小山田は何處に居り升か

(原)彼は御門前へ殘し置升た只今召連參らん(ト潔あけて出て

合がしらに義助の立聞せしを見咎め)ヤー下郎の身を以て此處に窺ひ居るは正しく訴人致す所存ならん

(竹林)(走り出で引捕へ頸がみ掴んで坐る原は表の方へ出る)大事を知し此老漢此儘、逃しては不安心でムる切捨升ふか

(大石)(微笑ながら)ドウヤ義助

(義助)最早死にましても遺憾はムり升ぬ

(大石)ソリヤ又何故に

(義助)只今貴方様が昔の旦那にならしやッたの拜見し升たうらモウ死んでも苦しふムり升ぬ

(竹林)然らは望の通り殺して呉ん

(義助)さりながらどうぞ此上の御願には御離縁なされト奥様に此御様子を御見せ申し御喜びなされる御顔を拜見し

てから死にたうムり升

（大石）さらばモット生て居れ○竹林氏御発ーなされ萬一此事口外致さば拙者が成敗仕り升

（原）（表へ出て）小山田氏貴殿へ大事の役目が中り、升た早く御出なされ

（小山田）應（ト答て裏手へ廻る）

（大石）発に又一ッの大役あり御幼君初め御附の老黨へ旗擧の時節到來せし旨と言上し近日是より一隊の軍兵と操出して東海道の中程にて御迎奉るべきに付き尊ら御出馬の御用意下さるべーと相願はねばならぬ菅谷氏は御側勤となされー方にて且御隱家も御存知なれば此役目は貴殿へ御願申す（此時原小山田と連て坐敷へ入る）

（原）小山田を召連升てムる

（大石）此へ御進みなされ

（小山田）宵の御酒氣が醒まーて眞面目な御樣子大慶至極にムる

（原）餘計な言と申されな鳥雀何ぞ大鵬の志と知らん大石氏の御遊興い餘儀なき譯でムるは

（小山田）さりながら君子は往に徑に由らずと承はれり增て拙者なんどト違ひ衆人の長たる人は別ーて身持と御謹なさらねば相成らぬ

（竹林）小山田が彼是と失敬な言と申募ては又々無禮の御詫言と申さねばならぬ某甚だ迷惑で、ムる此使は別人へ頼み升ム

(小山田)アイヤ此一大事は是非に拙者が申請升

(大石)小山田氏の剛直い某も喜ばしく存ずる此儀い同人へ御任せなされ

(原)在京の同志へ申通ずべき事い過刻拙者より逐一申含めましてムる

(大石)小山田氏聽れよ在京の諸士萬一暴發する時い數多の人を犬死させ謀し事も畫餅にならん

(小山田)夜を日に繼で馳參らん

(大石)よく用心なさらぬと路次にて敵に捕へられ牢舍の身と成り升ッ

(小山田)承知致してムる

(大石)さすれば生命も全ー難ー

(小山田)生命い惜みませぬ

(大石)されど獄卒どもの手に懸りみじめな最後になり升ッ

(小山田)其儀は望まーからずされば縛目に逢はぬやう眞直に上京仕らん

(大石)夫のみならず萬一敵に見顯さる時は母や妻子に難儀が羅らん覺悟ーめされよ

(小山田)(少し愁傷の體)モウ左樣に氣に係るとを仰せられるなO ムスリヤもしものとがあれば母や弟を初め妻子までも失はんか(此所詞とぎれる)O大石殿爰に一ッの御願がムる拙者の家は東海道の途中にて左のみ迂路にもしはず一寸立寄り此世の暇乞致し度存じ升

(大石)武士たる者が大事を抱る時は親戚朋友も見反らず

（小山田）然らば我家を外に見て通り過ねば相成ませぬか

（大石）されど生命を擲て必死の場所に向ふとなれば今生の暇乞餘儀なきとでムる某貴殿の母御には一度御目に掛りしとがムる烈婦の御氣象よりも恩愛に引れ未練の擧動はなさるまひ

（小山田）拙者が斯く人と成りしも全く母の教育でムる

（大石）殊に貴殿の御親父は先君の爲に打死せられし人でムれば其墓を見ても義心を奬ます一端とならん乍併家へ立寄とも一ッ時にて十分でムるぞ○然らば御無事に上京なされよ○斯く手筈の整ふ上は家を捨て妻子を捨て剩へ酒色に溺れて名と汚し千辛萬苦も其甲斐あり他國の奴輩追拂ひ我家國を恢復し先君の御鬱憤な霽し多年の本懷を達せんと目下アラ喜ばし心地よし

二幕目終り

三幕目

第三段

莊院の談話

舞臺右の方は小山田の莊院高峯には雪のかゝりし山又山と遠見の景茂林の側に一構の屋敷あり切幕にて家の内をあらはす仕掛左の方に一宇の寺院あり家の持佛には小山田家先祖代々の位牌を列ぬ其左に一筋の小路あり切幕にて家僕一人籾を摺る下女二人午飯の用意をする體小山田の母そちこち立廻る體嫁は小兒を臥かす體時刻は巳の刻計りなりと察すべし

（お三お熊）（午飯の仕度去ながら詰らぬ事を諍ひふざけて居る）

（晩稻）（小山田の母）サア〻二人ともふざけすにさつさと仕度をし升ふぞモウ程なく作男どもが畑から午飯に歸る時刻

ヤ

（早苗）（小山田の嫁）母様モウ正午ういなそんなら飛脚屋の通る時分今日はこちの人から便りがあるそうなもの

（庄之助）（小山田庄左衛門の弟なり）（奥の方より出來り）嫂様私が一ト走り行て見升ふチ、向から飛脚が驅て來ましたアノ手を振て大股に歩行く樣子はどんと大きな蝶々のやうジャンリヤ來たぞオット家へは寄らぬア、通り過たわいな

（早苗）通り過たらけふも便はないと見へるこちの人が家を出てからモウ半年餘り便りのないのは家の事を忘れさえやんしたのでがなござん去ようう定めし其當坐は何か家へやりたいものじやせめて一筆書送ふと思はさんしたでわらうが今日此頃は都の花に御目がうつり妾のことは御忘なされしと見へまする

（晩稲）嫁女さやうな愚痴を申まいぞ分は其樣な者ではない

（早苗）さらば御病死でもなされたらうか

（晩稲）又ーても詰らぬ言を云て私にまで心配させるもーものとがあれば朋輩の衆より知せて下さる筈

（早苗）さらばお怪我でもなれたのでムらうかいナア

（庄之助）（傍より）ソリヤ兄樣の事かいなイヤ〻私の兄樣は昨日母樣が御咄しなされた日本武尊のやうな強いお人ジヤに依てたとひどのやうなことがござつてもお怪我なぞなさる氣遣ないノウ母樣又何か面白お話と聽せて下されイナア

（晩稲）モウ私の詔を聽ずと學問を精出して早く獨りで武將

傳を讀やうにならねば成升ぬァ、彼是云ふ內作男どもが戻て來たコレお三支度はよいかや

(庄之助)(作男より蝶を一疋貰ひ)母様是御覽せよ與作が此やうに奇麗な蝶を呉ました

(晩稻)オ、うつくしひものッヤ去かし夫は玩弄にはなり升ぬ早く放してやれ

(作男の妻野卿の花をおくり又壹人は晩稻へ一束にして早苗へ椿の枝をおくる)

(晩稻)種々の心盡し是は皆の衆かた去けなふぞんじます此椿は佛檀へ供へ升ふコリヤ三ヤ御佛檀へ御初穗を上げたか○南無當家の守本尊様の御利益を以て家內の災を攘ひ一家主從別しては躬の身を遙に守らせ玉ひ安全に歸宅致升やう御守り下さるべし(ト新念する)

(早苗)(も搖籃と側に置き子供を佛檀へ向はせ)サァ坊も拜んで呉よ○南無先祖代々我家を守らせ玉ふ諸佛神夫が無事に歸宅致すやう願ひ升る

(庄之助)(膳の前にすわり)コレお三吾儕の箸がないぞどうして飯を喰るのッヤ

(お三)若旦那様の御手の下にあり升

(庄之助)吾儕には魚と玉子と澤山付て呉れ

(晩稻)今の先に朝飯をたべた計り其様に空腹箸はないけれど作男共の晝食致す相伴するのッヤぞよ

嫁女ヤ何はは去うなくとも餅一ッたべたがよいァ、又泣てか困たものだのふ

(早苗)私しやこちの人に見捨られはせまいかとそれ計りが

心配でなりませぬ

(晩稲)あきもあかれもせぬ中でそのやうな言を申さぬものジャ

(庄之助)コレお三餅をモウ一ッ呉れよと云ふに聞へぬか

(お三)若旦那お毒になり升よ母様へ御願なされ

(庄之助)(立上り)コリヤヤイ兄様の御留守中は男は吾儕計り
ダヅ

(お三)(膝ついて盆を出し)さらば一ッ御取りなされ

(庄之助)吾儕が立て居るにすわつて給仕するは吾儕が怖い
からであらうナァ

(お三)ィエ〻怖くはござんせぬけれど私が立たらあなたが
取にくからうとぞん云てゞござゝ升(と笑ながら逃る)

(庄之助)母様お三がわしを馬鹿に云てもようムるカヤ早く
廿歳計りに成たいものださうしたら誰も馬鹿にはせまい

(晩稲)さうはなゝ升ぬぞ人の尊敬は年の多少によらぬもの

(庄之助)云かゝ大きうなれば大小を差して日本武尊のやう
に諸國を歩行ますわいナァ

(晩稲)オヽ強いものジャ去ながら家を出ても直に母や嫂の
そばへ歸度なるであろ

(庄之助)ソレデハ家に居るのがよいのでムるかや

(晩稲)夫も確は定められぬ家に居て仕合の事あゝ他へ行て
仕合の事あゝ

(庄之助)そんなら何と致せばよろしいか

(晩稲)サそこが人間萬事褒貶が馬といふ比喩の通りジャ

（庄之助）母様その蹇翁が馬の話聞せて下されヤ

（晩稲）ヲヽ話去て聽せま去よ昔或所に少許の田畑を持安樂に世を送りし老人あり其名を蹇翁と云ふ其家に希代の名馬あり

（庄之助）吾家の馬よりもよいのでムるか

（晩稲）オヽよいとも〳〵百層倍もよいのジヤ

（庄之助）ソレハ仕合ものジヤナァ母様

（晩稲）いや〳〵其馬を盗まれた

（庄之助）ソレハ嘸悲い事であつたろム

（晩稲）イヤ悲しむには及ばぬと八日程過てから其馬が歸て來た

（庄之助）オヽ誠に吉日ジヤヲ

（晩稲）イヤところが大悪日でムる其馬が大蛇に嚙れて狂亂に成てあばれ廻り家を毀去て仕舞た

（庄之助）蹇翁が宿なしになりましたらう

（晩稲）イヤヽ其馬を埋るとて穴を堀りし處大層な黄金を堀出し日本一の金持になつたぞヤ

（庄之助）モウ一生心配いムり升ぬナァ

（晩稲）まだ〳〵其後種々の公事が起りそれがため立派に作りし家藏を一度も住はずに人手へ渡し其身其儘にて追出されました

（庄之助）嘸殘念であつたらう

（晩稲）去程に一日も經ぬうち大地震があつて其家へ住ひしものは一人も殘らず潰されました

（庄之助）成程是は仕合な事でムる夫からどう致し升たか

（晩稲）夫より褒翁はわづかに殘ゞし黄金の指輪を賣去るなり其金錢で杭と板を買ひ求め粗末な小屋を作り生涯穏に送ゞしと云ふ

（庄之助）其話は何か謂れのある事でムゞ升か

（晩稲）されば人間は如何樣の事あるとも仕合ジヤの不仕合ジヤのと申さぬもの確な事はたつた一ツ外ないと申す事

（庄之助）何でムるか

（晩稲）儕が勤むべき事を勤めて善根を行ふ計りジヤ（此話の中に作男作女共追々食事と仕舞樣先へ集り話を聽く）サアゝ皆の衆も畑へ行やれ○人間一生の浮沈を種と去て榮枯得失を簡短に說きしは此喩言はど能く出來たものは

ムらぬ

（此にて男女ども打連れて右手の方へ入る）

（庄之助）（村の子供の跡より走りながら）與太郎ヤ和主は褒翁の話を知るまいナア（ト云ひながら表へ出て行く跡には姑と嫁二人）

（晩稲）嫁女ヤそのやうに鬱で居てはならぬ當もなく往來計り詠ても詮ない事チト氣晴しに米の苅上を見に行やれ

（早苗）成程是も詮ない事ドリヤ御一所に參り升ふ

（晩稲）程なく躬も歸るであろ忘れて居る中には不圖戻て來るともあるものジヤお三お熊跡をよく片付て置やれ

（早苗）お三や坊の守を賴むよ（ト嫁姑二人連立出て行く）（跡には下婢二人）

（お三）お熊どん情人がそこらへ來て居ると見へ大そうに精出してお働きだね墓が行てよいけれど餘り急で仕事を殘してはならぬよ私は家に居て彼人のと思ふて居るのが樂みだ（ト仇口臺詞で奥に入る）

（小山田）（舞臺の右の方より驅出し庭へ入て家中を窺き）コリヤ誰も居らぬか庄左衛門只今戻たぞヲウ皆畑へ出たと見へるナべん〳〵待て居ては時刻が移る歸が遲けりや行て見ようが何しても村落から我家の見ゆる嬉しさに心も宙を一足飛餘り急で來たせへで息は切れる足は勞れるモウ一寸も動れぬ○ア、武士の習とは云ひながら生れた時から住馴て離れともなき此土地へ恩愛深き母人や妻子を置て永の旅歸と云ふも僅に半晌又の旅路へ向はねばならぬ心

憂とヨヤナア○それはさうと先菩提所へ參詣して急使の役目無事に仕遂るやう父尊靈へ御願申さう（ト家の側なる墓塲へ入り鐘を鳴らして禮拜し）南無御先祖樣父上樣何卒御靈德を以て家名を墮さぬやう御守下されよ若又戰死致しゐへば御座を頒て御待下さるべし

（お三）（鐘の音を聞て出來り門口へ立墓所の方をながめ）ハテナお墓所の前に居るのは何所の人であらうナ、さうヨヤ此方の旦那樣旦那樣に逢ひない是は御芽度事お熊どん早く畑へ出て旦那樣が御歸ヨヤどならッシヤイ

（小山田）ドリヤ吾儕が畑へ參らふ

（お三）ヤア旦那樣あなたは是へ御掛なされて御休み遊ばせ御草鞋の紐解き升ふ

(小山田)イヤ〳〵

(お三)御杖も御笠も御部屋へ運升ふ

(小山田)イヤ〳〵其は此所の手近へ置て呉れヤ、何も構ふなよ(お三不審の顔して退く○小山田獨言)今日歸宅せしは久〳〵にて母人や妻子に一寸面會致し訪ひ慰めん爲め計りされば嬉しと思ふも瞬く隙是が此世の暇乞になるかも知れぬ(ト愁歎する)

(庄之助)(息せき切て驅來り兄の袂に縋り付)オ、わしが一番ジヤ

(小山田)オ、庄之助何時も達者で大慶〳〵(間もなく早苗も入來る)早苗か

(早苗)こちの人

(小山田)逢たかつた

(早苗)オ、夫や嘘の事永の旅に只の一度も御便なきは御見捨なされしに違ひない

(小山田)ナンノ〳〵和女が事片時も忘れるものか家を出し其日より心に掛るは其方のこと

(早苗)思は同し妾とてもあなたの御身を案じては夜もろく〳〵眠られず漸眠ればあなたが御難義なされる事又或時は御怪我なされト御姿を見てアット驚き呼叫ぶ聲に我目を打覺し泣て計り居りました(此時母も歸る)

(小山田)オ、母人お懐ふム り升た

(晩稲)朝夕神に祈りし甲斐あり無事の再會喜ばしいぞヤ

(小山田)其甲斐あつて今日只今御息災な御樣子を拜しまし

て誠に大慶にムり升る

(晩稲)我子ではあれ其方は主人主人の芽出度旅歸りちとの儲はせにやならぬ私は是から奥座敷掃除食事の仕度何や彼や奥へ行て差圖をする親子夫婦愛に隔てはなけれども待こがれしは此嫁女おまゑは茲で躰の世話

(小山田)アイヤ母上其儀は

(晩稲)(耳にもかけず)二人を殘して庄之助も私と一所に奥へおじや(ト二男を連れて奥の一間へ入る)

(小山田)モシ〳〵母上食事の仕度は入りませぬ

(晩稲)仕度と云ふも雲時の事後でゆる〳〵話しまゑよ嫁女躰の機嫌をそこねぬやうにシヤレよ

(早苗)ヤアこちの人是からは此日頃便もせず私計りに苦勞

させた替り可愛がつて下さりませ

(小山田は傍を向て到惑の體)

(早苗)あなたは何を考へてムんすエ假令あなたは離れる氣でもわしや離し升ぬどうあつても

(小山田)(ます〳〵到惑の體)ムヽスリヤどうあつても離さぬと

(早苗)どうぞモウ何處へも往かずに留ると云ふて下さんせ

(小山田)サ其儀は只今は相叶難し何れ再び立歸りし上緩〳〵母上や其方と安心させん

(早苗)なんとおつしやります

(小山田)今度は留り難し

(早苗)どふ云ふ譯で

(小山田)又出立せねば相成らぬ用向あり

（早苗）其御出立は何時の事

（小山田）只今直に

（早苗）ソリヤ眞實のとかいナ御戯言には酷過るわしやそんなと聞ともないわいナァ

（小山田）ァヽコリヤ困たものジャ〇コレ早苗そなたも武士の妻なれば武士の道は存して居らん大事の役目を抱ゆる時は假令如何樣な事あるとも留り難し

（早苗）なんぼ武士の意地ジャと云ふて妾が狂氣しても御構なされぬ御心か

（小山田）何の〳〵

（早苗）それのみならず母上が歎き死なされても御構なされぬか

（小山田）イヤ〳〵母上は御氣丈ぶ御方決して未練の御心はないさりながらもしも御目に涙を浮め玉ふを見れば吾儕が出立し得ぬされば御暇乞を致さず直樣出立致す故其方よりよろしく申上て呉れよ

（早苗）（立腹の體にて後向になり）そんなら御留申ませぬサッサト御立なさりませ

（小山田）サラバ女房留守を頼むぞ母樣御許し下さりませ（ト云ながら早足に走り出る）

（早苗）（振反り見て喫驚し）ヤァこちの人はんまに御立なされたか〇母樣早ふ御出下されもしてかいな

（晩稻）（微笑ながら出來り）何を仰山な聲をするのジャ喧嘩で

(早苗)(庭の方を指しながら)御覽なされ母上様

(晩稻)躬は何處へ參たのシャ

(早苗)又旅立となされたわいナァ

(晩稻)馬鹿を云はーやるナ

(庄之助)私が追かけて呼戻ー升ふアレ〳〵モウよつ程遠へ行ーやつたそーてァノ早足に行くとわいなァ意地の惡兄さんシャ

(晩稻)暇乞をせず驅出せしとは怪ーからぬ事シャ

(早苗)兎角殿御は强顏もの

(晩稻)去ながら是には何か仔細わらんうかと咎立はならぬわい

(早苗)どう云ふ譯やら心がゝり

(晩稻)思出せば先つ年私の眞人が仔細も告ずに火急の家出夫が此世の暇乞其翌日に

(早苗)御果なされしかモウシ惡ひ前表でござり升わいなァ

(のふ悲しやと嫁姑ゑばし涙にくれ居たり)

(晩稻)(ハット心附き)ァ、コリャ私が惡かつたモウ心を丈夫にして歎くまひ歎は却て不吉の種平氣で居れば不吉な事も遠かるものシャ

第四段　富士の山路

舞臺は山路の道具立

（小山田）（右の方より出て峠へかゝり）モウ此峠の絶頂まで來れば格別急がずともよいちと徐に行ふ兎角我家の見もる内は鉛の草鞋を穿て歩行鐵の鎖で後へ引れるやうであつた去かし此岩角から見へるのゝ我家ではないかチヽさうヤ此方が茂林彼方が田畑シテあの家根が我莊院廣いやうでも此所から見れば雀の巣のやうで掌へ乘さうだ此景色を手に載せて旅をすればよいドリヤあの清水を掬で握飯を喰はふか〇ア、今頃は無母人が御歎きなされてござらふ是を思ふと胸が張裂さうで飯も喰ひたうない事のと鳥の餌食に呉てやれ（ト放り出す折柄左の方に小唄の聲聞ゆ）ハテ珍らしいあの唄の聲里の女子か旅藝者か鄙には稀な浮れ節（ト云ながら清水の方へ行く）〇折から來かゝる旅女（お島）ドリヤ此所で一休あの清水で喉を濕し一升ふ（ト清水の側へ行き小山田に會釋し）モシ御侍さん御迷惑ではござり升ふが暫く此所に休ませて下さりませ

（小山田）遠慮に及ばぬ　サヽ是へ（ト顔見合せて二人は少不審の體）

（小山田）（重ねて）コレ女中其方は何より參りしぞ

（お島）ハイ私は江戸から參りましたわなたはたしか

（小山田）ヲヽ何處やらで逢た事がある

（お島）あの（ト云た計り口曇る）

（小山田）ア、それ〳〵云兼るので相解たシカモ此程吉原の酒

樓で逢た酌女○見れば女の獨旅彼の家を追放され乞食に
でもなりやッたのか

(お島)縁起のわるいとおッ去やるな。だが今日は嬉しき吉祥日
何と云はれても腹は立ませんわいナァ

(小山田)何がさやうに嬉しいのッヤ

(お島)モウ一ト足で生れ故郷へ着きますから

(小山田)本來其方は何故に他國せしや仔細ぞあらん語り聞
かせよ

(お島)申もお辱しきとながら親の許さぬ不義淫奔よーなき
男に欺されて家出せしは此春のと所も丁度此峠我家の方
と振返りァ、悪ひとーて母に心配をかけ濟ぬ事とは後悔
すれど其時は男に添ひたい計にて泣々此所を立去ました

其天罰で程もなく身は便なき捨小舟去らぬ他國に漂泊し
迷を醒す此清水

(小山田)宵の嵐の烈しきに塒離れし雛鳥が今日の日和に羽
を乾し歸る無事の顔見る母鳥が喜さこそと察し入る○コ
リヤお島何をうつかり見て居るのッヤ

(お島)先程あなたが御時なされた飯粒と拾ふて居るあの母
鳥が雛をはごくむやうすを見れは只餘念なく子鳥の喜ぶ
のを樂む風情是につけても母親はど世に慈悲深きものは
ござり升ぬされば今日歸ッたら少しは叱り升ふが家へ入れ
ぬとはムりません其大恩ある母親に暫しなりとも心配さ
せたのは思へば罪深きことでござんしたわいナァ

(小山田)(側で獨言)吾儕の母も今頃は泣て居るだらう

（お島）あれ御覽なされ松林のあなたに社があり升其少し先は私の家

（小山田）然らば身共の家を左に見て彼所より右へ切れるのジヤな

（お島）ハイ

（小山田）もしも途中で身共が領地の百姓に逢たら旦那は程なく御歸宅になり升必配せぬよふ母人へ申して呉れと（傳言を頼んとせしが）イヤ〻夫も無益矢張和女は少しも早ふ家へ逝れよ

（お島）さらば御無事で御道中御緑もあらば又御目に掛り升ふ（ト立去る跡に小山田獨り）

（小山田）心なき小島の擧動素性賤しき旅女の言葉を見聞して初て氣の着く吾儕ならねど恩愛深き母親に何故一言の暇乞も述ずに驅出したか我ながら鈍ましき所業したり母は固より丈夫の氣象此度の儀は斯々の次第なりと御話申たとて愛に引れ義を忘れ未練の留立なさるやうな方ではないに故も知らせず心配を掛ては安心ならぬ事のモ一度取て返し母に對面し目出度首途を祝して貰ひ騎馬にて京都へ驅登らばさのみ後れはせまいさうジヤ〻（ト點頭て籠の方へ立戻る）

第五段、一家の哀樂

道具立は三段目の通りにて夕方の景色○村の男女仕事を終りし體

(晩稲)(早苗が獨りくよ〳〵と物案じなる樣子を見て)コリヤお三孫はモウ乳がはしかろ嫁女の所へ連て行きやれ○村の衆は夕飯を仕舞たら勝手に休息せよ去かし人は骨を折て働た後では又氣保養をせねばならぬ老爺や昨日讀かけた武將傳を讀ぬか

(庄之助)昨日は日本武尊が太神宮より給はり寶劍にて道の草を薙拂ひ相摸の海岸へ來たところまでッヤ

(武將傳)其より相摸の國へ到り向ひ岸なる上總の國へ渡らんと大小の船を集合へ沖へ出玉ふ折柄颶風起り尊の船危

かりければ尊の妾橘姫是は龍神の尊へ祟を爲すなるべし妾の身を牲として尊の命に代んと身を躍らせて海底に沈みぬ程なく風歇て尊は難なく上總の國へ着き玉ひそれより又陸奥の國へ趣き諸々の夷ども討平げ都へ還らせ玉ふ道すがら碓日の峠に登り東南の方を眺め橘姫のと思出させ玉ふて吾妻戀しと宣ひける是東の國を吾妻と申云はれなり

(庄之助)私も尊のやうな勇者になり功をして來たひものッヤ

(早苗)御前も矢張親や妻子に物思はせあげくのはてに母樣へ暇乞もせず出歩行心かへ

(晩稲)早苗よ。そのやうなと云ふて男の子の心を弱ーてはな

らぬぞ殊に若き女の身とーて夫の讒訴下の者の思はくもあるちとたーなみやいのふふ

(早苗)イエ〳〵何と思はれても構ひませぬ明朝は未明に起脱て

(晩稲)何所へ行くのジャ

(早苗)サァ夫の跡を追ひ行て在家を尋ね何かの様子を聞ます積り

(晩稲)とほうもない事女の身で夫の役目の詮鑿とは大膳にも程があるおぬしの役目は子供の世話必ずそさうな事せまひ

(早苗)さりながらいかに火急な御用があらふと母様へ一言の御暇乞も申さずに御立なされしは餘り強顔なされ方(ト

かさ口く説く此時表の方にがや〳〵と噪ぐ聲聞ゆ)

(庄之助)(駆來り)母様嫂様お喜びなされ兄様が見へました(ト告る間もなく小山田は息せき切て入來り母の前に平伏し)

(小山田)母上様今一度御暇乞に罷歸りました先刻は取急御挨拶も申上ず出立仕り恐入てござり升

(晩稲)何の〳〵更々咎は致さぬぞ

(小山田)コリヤ女房其方も先程のやうに得心致さず恨んで居ては氣が濟ぬ今改めて機嫌よく首途を祝ふて呉れよ

(早苗)折角御戻なされても又直に御立なされてはソリヤ人じらーと申もの故は知らぬどあなたのそぶり案じて見れば氣にかゝる是が泣すに居らりようか

(晩稲)コリヤ躰此度の儀は何も心配なことではあるまいがナ

（小山田）アイヤ御氣遣めさるな心配なとはござらぬ去ながら朋友へ約束致せし火急の用向がござる故斯く取急のでござり升

（庄之助）モーシ兄様モウ日も暮れ升れは御道中も暮取ますまい今夜は家へ御泊りなされ其替り明朝早く御出立急で御歩行なされまし

（小山田）假令何程急でも三時四時の遲刻は償ひ難ー

（庄之助）サァ〳〵御泊りになされ（ト大小持て奥へ運ぶ）

（晩稻）まだ其方忘れものがある是見やれ（ト搖籃を傍へ推ー遣る）

（小山田）餘り急ますするので小兒の事はとんと忘て居りましたー

（早苗）エヽ胴欲なこちの人

小山田は搖籃の傍へ座る晩稻早苗庄之助左右に居並び一家團居する體○下女は奥の方に立働く○入相の鐘にて幕になる

三幕目終り

四幕目

第六段　闔國の安危

道具立飾附渾て三幕目の通り但三幕目とは中一日隔ー早朝の所なり

（晩稲）（獨り戸を開けて様先に立ち出で）サァ〳〵お熊もお三も起て出ぬか何時まで寝ているぞ（ト云ながら庭へ下り立ち）ア、昨夜の夢見の悪さドリヤ朝風で吹晴しまえよト（向ひを屹度見渡し）ハテ怪しや彼の谷間より白氣立昇りしはアレ〳〵此方へたなびき屋の棟にか、れり凶事か吉事か氣に掛る事ジャナァ

（此時庄之助奥の方より外へ驅出る）

（晩稲）（は呼留め母様何ジャと絶て何時もにこ〳〵機嫌よき小供り付仰向く顕を手に受て心地よげなるものジャナァ○庄之の笑顔は愛の妙薬ハテ

助其方は朝から驅出して何處へ行のジャ

（庄之助）昨日兄さんが裏の藪で杖にするとて見て置た竹がござれどナ私やモット良いのを知て居る程に其を切て美杖を拵へて進げ兄さんを驚かす積りでござる此事沙汰ー

て下さるナヨ

（晩稲）ナ、其方いそれが嬉しひか

（庄之助）アイ嬉しふござる

（晩稲）兄が他所へ行のが嬉しひか

（庄之助）イエ〳〵

（晩稲）ろれでい其方が拵へた杖を兄に持せるのが嬉しひのか

（庄之助）サイナァ

（晩稲）そんなら其竹早ふ切て來や○ァ、子供のがんせない
と人の出入を喜んで物日節句のやうに思ふて居る誠に氣
樂なものジャ○兄庄左衛門があのやうに驅り歩行たも昨
日のやうに思へどモウ十、年子供の生長するに從て恩愛が
深くなり又氣苦勞も一方ならず漸く育て上げしあの兄も
先達より江戸へ行き偶々歸れど又出るとの事歸らぬ方
が增ジャッたらう夫ン然ふと一昨日歸った時殺々して居
られぬと茶も呑ずに出て行しが夕刻又々立戻り矢張一寸
の間と云ひながらつい其儘に今朝まで逗留どうやら顏色
もよからぬ故仔細を問へど案じないとの返事嫁ン年もゆ
かぬ故彼の云ふ事眞に受て喜んでン居れど一寸と云ふて
二夜の逗留今日ン是非とも仔細を尋ねて見ねばならぬ（此内

下女ども皆サァぶら〳〵と手を明て立て居ずにさつさと
働かぬか殊に今朝ン旦那の御出立お熊ン朝御膳の仕度を
せよお三ン旦那の寢所へ行き御膳でムルと申上げよ
（お三）ハイ（ト返事した計ぐずする）
（晩稲）何をして居るのダ
（お三）御居間の方ン未だ夜が明ますまいと存じ升から
（晩稲）閑話云ンずに早ふ往ぬか
（お三）只今參り升○ダガ
（晩稲）未だ立ぬか
（お三）昨日私が起したら旦那が大そう御不機嫌で困たから
今朝は御免ダお熊どんおまゑ行てお呉れ（ト突遣るお熊拔
附て聞居たりしが大聲に
足して襖に耳を
呼起し笑ながら退く）

（晩稲）まだ覺ぬやうジャ

（お三）旦那様朝御膳の仕度が出來升たモウ表の方は夜が明ました（ト聲を掛けながら襖を蒔散して笑ふ）

（晩稲）人惡な戯事する女子共ジャ玄かし若者は詰らぬ事をして笑興ずれど此私は何故か心が浮立ぬ○サアヽ膳立を（ト云ひながら外の方を見て）ハテ心得ぬ早朝から見知らぬ士三人が此家を指て來る樣子

（竹林）此所でござる屋敷の構へ庭廻り兼て見覺がござる（ト庭へ入り）其所に御出なさるは小山田氏の母御ではござらぬか

（晩稲）ハイ妾は小山田の母、晩稲と申者ジテ各位には何れよりか何用あつて御越なされしやつひに見覺もなき御三人

（大石）ホヽお忘あそしは無理ならず去ながら屈指れば十年以前トサ申たら定て御心當りもござり升ふ

（晩稲）ムヽスリヤ彼の騒動の其折に

（原）然も味方の運微く戰破て主君は重傷已に御生害遊ばされんとせし折から御真人重兵衛殿御勸申し一先其場を退て此家に隱し奉り厚き御身が御介抱御金創も平愈して再び御出陣あらんとせし所

（竹林）天なるかな命なるかな其後に頼となせし奴輩は言甲斐なくも主君を賣て敵へ降參殘るは僅に一隊の小勢必死の防戰なすと雖も衆寡敵せず過半は討死

（晩稲）其時妾の真人も

（大石）御殉死なされし其御歎もある中で甲斐〳〵しくも子息

の教育天晴剛の者にあされーは流石勇士の御内方

(晩稲)女ながらも御國の蒼生國の爲には命も物かわ十、年以來此國は讐敵の手に落ち暴虐無道の政事此憂目をば孫子の代まで殘さぬやう神や佛に祈らぬ日とてはござり升ぬ國の盗賊夫の讐敵一日も早く攘ひ盡して往生致し度存じ升

(大石)晩稲どのお喜なされ復讐の日限も近づき升た坂東諸國にては旗擧の手筈相定り御幼君には既に御隱家を出玉へば我等は是より途中にて御迎へ申さんため江戸表へと出立し此旨先君の尊靈へ告奉り序ながら御身と訪問申さんと是まで推參致してござる

(原)人も多かる其中で衆人の目がねに叶ひ大切なる役目に

選れー小山田氏母御も嘸や御滿足でござらうナ

(大石)此度御頼申せー急使の仔細御子息より御聞成されー

や

(晩稲)何の話も承り升ぬ

(大石)貞操節義の御身なれば假令御聽成されても苦ふござらぬダが御子息も用心深き方なる故御話なかりーと見へ升

(原)假令一言半句たりとも敵の間者に漏聞へては一統の難儀大事の破れと成る基誰にもせよ聞せぬが宜ーひのでござる

(竹林)斯く老人のやうに用心深き小山田氏御頼申せー一儀は首尾よく濟せられーに相違ない

（晩稲）其御使は左程迄に大切の儀でござり升たか

（原）萬一京都に居る者旗擧の相圖を聞くと二日延引致すゝ又は早まつて事を起せば數多の味方が生死の界此一事にても使者の大切なるとは御察し成され

（晩稲）モウ夫で相解り升た委細は御話なくとも宜ふござる

（大石）殊に京都は同盟の者多人數なれば手筈の違ふ其時には謀りしとも書餅に成らん思へば身の毛も竦立はどの痛でムる去かー彼地の事は御子息へ頼みー故一向に心配仕らぬ

（此時晩稲は色青白て忙然たり）

（竹林）いかにも小山田氏へ頼みー事なれば心配はござらぬ途中にて妨なすものあるとも切拔て上京致ーたでござら

う

（大石）（晩稲の樣子を訝り）晩稲どのどうかなされーや

（晩稲）イエ〻何も致ーませぬ（ト云ながら家の方を打見やり獨言）アヽ困た躰めだ早く底から馬を引出ー此三人の目に掛らぬ内片時も早く上京するやうに知せたいものジャ

（大石）（獨り言）此婦人は何故あの樣に家内を窺くゝ合點の行ぬとである

（原）（ハ氣も付ず只晩稲が愁歎すると見て）竹林氏貴殿は行故小山田が切拔て上京するなどゝ仰せられた夫故母御は御心配の樣すコリヤ貴殿の誤りジャ

（竹林）晩稲どの身共が申過しました御子息には程なく御手拘なされ目出度御歸なされ升

（晩稲）（獨言）手拭どころか

（庄之助）（外より驅入りて）母様よ兄さんは御部屋に居ると思ふてござるう

（三士）さらば彼所の部屋の内に

（庄之助）イエ〳〵部屋には居り升ん

（晩稲）（庄之助を引寄せ）ナ、さうジャ彼所には居らぬイヤ家に居る筈はない何も申な御三人へ丁寧に御辭宜をして早く家へ入れ（ト云はれて庄之助は辭宜をして家へ入らふとする）

（大石）（呼留め）同盟人小山田氏の弟御とあれば一入懷しく存ずる是へ御出なされ（ト云ふ庄之助は晩稲が留るを聽ず大石の側へ往く）

ナ、敏捷子ジャ。年は何歳。ム、十一ト

ナ。シテ兄御は程なく

御歸りか。何處に御出ジャ。

（庄之助）アイ兄さんは嫂さんと一所に彼の山の下を歩行てござる（大石）くわッと立腹の顏色庄之助は恟りして母の側へ退く）

（晩稲）ア、知らぬとは云ひながら困た事と申て兄の大事と成たッヤ早く家へ入りお念佛でも唱へて居よ（ト云はれて庄之助は家へ入る大石原竹林三人何か呼き合ふ）

（大石）コリヤ女賢女めかしてまざ〳〵と和女此方を欺したナ

（晩稲）イエ決してお欺し申は致しませぬ躰が役目の事承るは今が始めてさうとは知らず留置て耻ひやら悲ひやら先刻から到惑致して居り升る

（大石）然らば何故あの子供が實を申を禁めしぞ何故ぴく〳〵

と事の露顯と氣遣しぞ

(晩稻)假令憎ーと思ても罪と蔽すは親子の情愛

(大石)和女の生み敎育ー子がさる放心者と成しは平素の躾の甘い故

(晩稻)其は情なき仰かな產落せーより此年月先祖の高名手拭と聞せ武士の魂作らんと心を盡してござり升

(大石)云聞せても馬の耳東風吹頃の庭の雪家の温みに解け易き鈍刀武士が女房と二人一所に遊山する內數多の義士が生死の界無益の問答時後れんイヤナニ原氏今より行て

ハ犬死ならんさりながら萬が一間に合ぬとも定め難ー必死と覺悟で只今より彼地へ至急に馳登られよ

(原)死骸の山の埋草と成を覺悟で上京致さん

(大石)あれ見よ女小山田一人背きしとて忠義の武士は幾許もある(晩稻はます〳〵恥入て床儿に腰かけ愁傷する)イヤ御兩人締急なれば二手に分れて上るべし拙者は自餘の諸士と共に我君を迎奉らんイザ〳〵(ト急がすれば原竹林都と役目懈怠の罪科は屹度成敗致さん覺悟せよ(ト云放て外へ出る)

(晩稻)何此儘に置ぬとや事の理非は兎も角も常から短氣な庄左衞門假令一旦ハ恩愛に惹れ重き役目と忘れても其過を面前罵られてハ耐へぬ氣質人手を待ず腹かき切て死ぬるハ必定さすれば恥辱を雪ぎがたー何卒死なせ度ないものジャ去迎外に工夫もなーアヽコリヤなんと去よう(ト云ながら菩提所の方へ振向き)モウシ御先祖樣御覽の通り家名に係る一大事

何とか好き工夫を御授けなされ此難儀を御救ひ下さらば生々世々の御高恩此身は此儘死にまーても苦ふござり升ぬ（ト祈念しつゝ墓所の内へ入る）

（此時小山田は妻早苗と舞臺へ出る）

（小山田）そなたの足が遅ひ故途墓取ず大きに歸宅の後れーのみならず出立の時刻痛く延引致した全體モウ今朝は京都へ着せねばならぬ筈サ、早ふ家へ入り旅の仕度に取掛ふ

（早苗）ヤア待てこちの人後れたとても二時三時たつた一言聞て給べ

（小山田）なんと

（早苗）今朝は是非とも御立とある故人の目覺ぬ其内にそつと起脱け二人連語り歩行た其場所は

（小山田）幼稚なじみの遊び所

（早苗）二人一所に手を引れ末は女夫と心で誓ひ中よく遊びーー其時に嬉ーきとを語ひーー昔も今朝は珍らーく思出ーて立寄る木蔭

（小山田）見渡す野邊は錦成す秋の千草の花盛り藤袴草女郎花見とれる目元うつとりと思はず見替す顔と顔飽ぬ眺望であつたよナァ

（早苗）サァ此樂ーみを忘れずに今度の旅をなされた後は家へ歸ッて側に居て何所へも行ずに暮さうと云ふて下されてちの人わーや夫訃りが樂ーみでござんすわいナァ

（大石）武士の務が相立ぬい（ト云ひながら庭へ入る）

（小山田）大石氏には何故是へ

（大石）ヤァ小山田時後れーと知らざるや

（小山田）何が何と

（大石）旗擧の報知後るゝ時は在京の諸士が身命に係る一大事を忘れーや當所へ停れと誰が頼みーぞ我等は汝の母を慰めんと態々是まで立越て樣子を聞けば思ひきやあきれ果たる汝の擧動抑小山田の家は先祖より汝の父に至るまで忠義の名高き門閥あるに汝の如き不覺者が居て家の汚れとなるを知らずや

（早苗）大石樣行儀正しき庄左衞門家に居ればとて何で汚に成升や

（大石）（耳にもかけず嘲笑ひ）未だ乳臭き髯で大石初め其他の人へ意見を述ー舌の根も乾ぬ内に此擧動臆怯未練の僞賢者と同志の人が爪はじきすと思はずや

（小山田）なに拙者を未練とやイデ此腹をかつさばき命惜まぬ證據を見せん

（大石）イヤトヨ小山田假令命を惜みーにゝあらずとも女色に溺れて武士道と忘れて矢張未練の名ゝ脫れぬ

（早稻）大石樣一家の和合を女色とゝッリヤ御詞とも覺へ升ぬ

（大石）云ゝれな女武士たる者が義を忘れ火急の大事を請合ながら女房と連て野掛遊山ゝ娼妓狂と差別があらふか一家の和合も大切なれど夫々爲めに國の大事を忘れさせし其方迚も同罪なるぞヤイ小山田汝は同盟を省しぞ望の通り何處へも出す女房の側に居るがよい去ながら汝の父に

霊あらばよも安穏に置れんや云ふ可き事い是までなり（ト出んとするを引留め）

（小山田）誤り入たり大石氏此上は父の墓前に於て切腹致して云譯仕らん

（晩稻）コリヤ身不肖ながら此母が父に代って差留る假令大罪を侵すとも未だ生先は三十年骨を粉にし身と碎き國家の爲めに力を盡さば贖ひ難きとやある死ぬる命を存へて後日事ある時に捨よ

（大石）手ぬるき母が教訓かな斯る未練の白痴漢と大事と謀る者あらんや

（晩稻）コリヤ身上役の人朋輩の衆が相手にせずは鎗持小者と成て戰場へ出よ夫もならずは詮方なし乞食非人と成り下ても苦ふない何がな功名手柄して今日の恥辱を雪がれよ

（早苗）妾も艱苦を共々に

（大石）女房と一所に暮したら格別困ることはない三十年の其内には見殊に母の詞を忘れ反って恥辱の上塗せん

（晩稻）イヤ決して忘れはせぬ名家と云はれる小山田の血統を受繼ぐ庄左衛門假令一旦過失ありとも母が一世の今の教訓忘れぬ證據は此通り生血を絞て誓文致す（ト云ひながら用意の懷劍拔より早く我と我胸貫けり）

（小山田）コリヤ何故の御生害死ぬるは拙者

（晩稻）イヤ其方は死なれぬ後より參れ

（早苗）御両人に咎はないみんな妾の惡ひ故

（晩稲）嫁女刀を持て來て場に渡去やれ
（庄之助）母様わーやどうせう（ト縋り付く）
（晩稲）チ、可愛や茲へ來い（ト庄之助の肩へ持れる）
（小山田）どうあつても死なねばならぬ迚も此世に居り難し
（晩稲）此塲を一旦生延て名を擧げ恥を雪がねば七生までの勘當ヲヤ（ト云て落入る小山田縋り付き愁歎する此内早苗は刀を持て來る）
（大石何を女々敷猶豫致す　サアじん茲ように腹切らぬか
（小山田）（早苗より刀を受取り是が此世の名殘ぞと顔見替すも他目と憚り刃引抜き）
母、人あの世で申譯仕る（ト云ふより早く腹突立てきり引廻す是にて幕になる）

狂言終り

跋

院本忠臣藏の大序ふいへらく、美味有と雖も食はされハ其味を知らそと、されハ遠き國ふいらてしらりの珍寶奇品ありといふとも、是を觀てその用を知らされハ、その便利とその珍異とを知るふよしなし、故ふ我西京西陣の綾羅ハその精巧すくれたれとも、觀さるものハ賞そ為きなく、北海道の產物ハその蓄藏法妙なりといへとも、食ハさる者ハ之を嗜まひ、我國内ふおきてすら如此、まして異國おや、爰ふ明治十一年の夏、佛國巴里ふ於て、萬國博覽會の興行ありし時、我日本の器具布帛大ふ

萬國の喝采を得て、諸人の爲ふ爭ひ求められしい、皆人の知る所なり、されども我國の百工おゝふ至り初て精巧を致せしふ非す、而るふ彼の好むと盛なりしい、彼國人ら目擊せし故ふあらぬや、その後前田正名君佛京巴里ふ於て、やまとと題そる戲劇を作り、某の梨園弟妹ふ授けて興行せしふより、全都人士ます〳〵我國物產の妙用を會得し、流行を致せりといふ、當時余甚たこれを怪て信とせぬ、思へらく演劇を以て人情風俗を解せしむるい論を待すと雖も、物品の流行を致す理なし、必ぬ附會の說ならんと、頃者君歸朝の後余ふ示すふ此戲劇

を以てす、乃ち携へて家ふ歸り讀むと數過、初て傳聞の信なるを解せり、抑博覽會い物品を陳列し人をして其功用を知らしめ、其精粗を評せしむ、然れとも倉卒流覽ふして一々其功用を熟知せしむるを得さるふなほよく人の嗜好ふ感觸せり、況や演劇の際、酒盃食盤飮讌の器具陳ねて酒客の前ふあり、團扇風を生し、煙管煙を吹き、綾羅立て舞ひ、琴瑟曲を奏し、百般の物品各々其所ふ立て、其用を示すに於てをや、外人の嗜好を刺衝し、物品の流行を致せしい思半ふ過ん、これを工業上より評すれい、此演劇い日本物品の活博覽會と稱すべし、萬國博

覽會ニ次テ功アリシトいふも過タリシトスヘシ、君前日貿易論一篇ヲ作リ痛ク外交の利害、貿易の得失ヲ論シ、輸出輸入の不平均ヲ救ふの策ヲ述ヘ、附するニ歐洲經歷の際目擊する所の工商業の實況ヲ以テセリ、其心ヲ商務ニ用ふるヤ盡セリシトいふヘシ、故ニ君の此戲齣ヲ作リしハ偶然ニ非ルト推テ知るヘキなり、庚辰の春

藤井善言題

明治十三年六月十九日版權免許

定價四拾五錢

著者　鹿兒島縣士族　前田正名　東京京橋區築地貳丁目三十六番地寄留

出版人　和歌山縣平民　北畠茂兵衛　同日本橋區通壹丁目十五番地寄留

244
1
202

東京圖書館
新着
函
架
號
大日本教育會書籍部
第
室
一七函
一架
八號
一冊

24/12

088926−000−6

特28−606

日本美談

前田　正名／著

M13

DBK−0110